



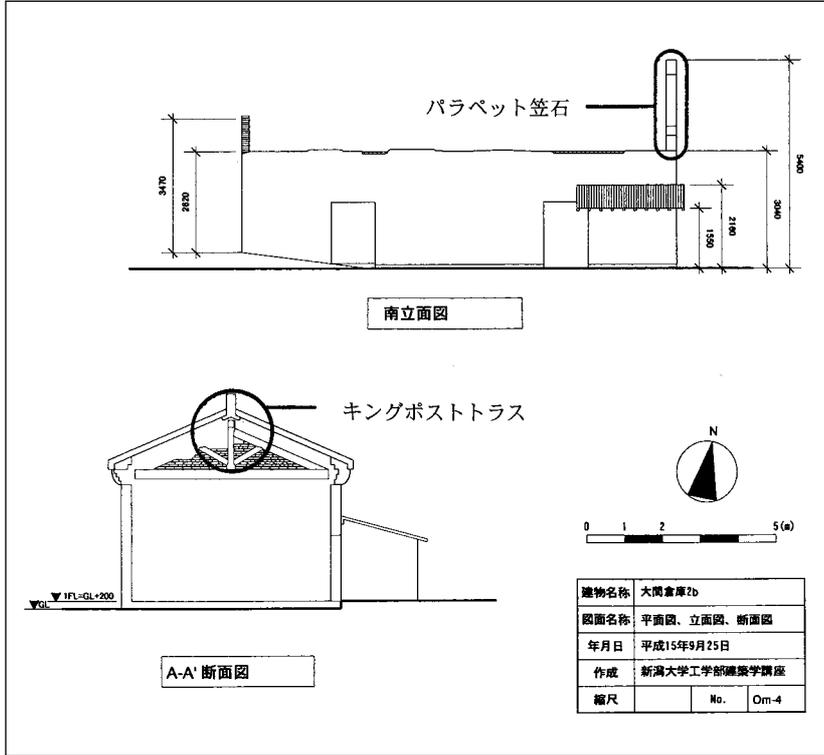
佐渡金銀山 未来に残そう 世界遺産

金銀山よもやまばなし(8)

大間港 倉庫(3)

相川の大間港北側約100m、相川漁港の南側護岸脇に中規模レンガ造の倉庫が残っています。梁間5・77m、桁行

外法11・35m、レンガ造平屋建て切妻造平入の建物です。外壁はモルタル塗り、屋根は現存していないため不明です。東側の妻壁に小屋組の木造キングポストトラスおよびパラベット笠石が残存し、構造が



建物名称	大間倉庫2b
図面名称	平面図、立面図、断面図
年月日	平成15年9月25日
作成	新潟大学工学部建築学講座
縮尺	No. Om-4

大間港の入口東側に残る倉庫と類似していることから、同様の屋根構造と仕上げであったと考えられます。

建築年代は、明治時代後期〜大正時代中期頃までに建築されたものと考えられます。屋根の崩落によって保存状態がよい物であると言えない状況であり、内外部ともにモルタル塗りとすることから、外觀でさえもレンガ造建築物としての価値を著しく損失しています。崩落したトラスの一部と考えられる木材も建物内の脇に残されていて、雨ざらしの状況です。状態悪化を招く前の早急な保存対策が望まれる建造物です。

佐渡鉱山は、明治18年(1885年)鉱山長に就任した大島高任、その意志を引き継いで22年に鉱山長に任命された渡辺渡の両氏によって、高任(たかとう)豎坑の開削、鳥越坑奥の銅鉱を採鉱しそれを選鉱する機械選鉱所の新設、北立島鉱山の新規開発など、明治期に入っ

ての第一発展期をむかえます。明治23年(1890年)の産出量を見ると、明治10年代の金産出量の10倍の60貫(225kg)を超え、銀の産出量は1000貫(3750kg)以上で10年代の3倍の増産をなしています。

大間港の近代化は、北沢選鉱所建設に伴う北沢の切取り土砂を、架空索道(釣り車道)で大間港に運び港を埋め立てました。数回波浪により挫折するも、タタキ工法で有名な服部長七を招いて、明治25年(1892年)ようやく竣工し、数棟の倉庫を建設しています。明治18年の1か月間の消費量の一部を見ますと、石炭450トン、食塩3300斤(1980kg)、石炭2200斤(1320kg)とあります。これらの物資のほとんどが大間港から陸揚げされ、これらの倉庫に保管されたものと考えられます。ここを訪れる人々は、木造倉庫に展示された明治の佐渡鉱山発展期の古写真とこの倉

庫を目にし、当時の繁栄ぶりや現在の光景を対比し、それぞれが思いをはせます。そのことが、当時のものがそのまま現存することの重大さだと思えます。

残念なことにレンガが相川で焼かれた特殊な大きさであることや、それを積む技術が伝承されなくて、建物の復原修理が困難なことは、誠に残念です。佐渡の隠れた史跡(大間港)を見学し、後世に残す思いを共感できたら幸いに思います。



佐渡金銀山室 74 3115